

殺せんせーの個人授業

ゆっくり霊沙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

殺せんせーはヒーローアカデミアの世界で教育を続けるようです

主人公は殺せんせーを先生と呼ぶようです

ヒロインは主人公と殺せんせーに習うようです

目次

プロローグ	1
5歳の時間	11
子育ての時間	17
子育ての時間2	21
怪物の時間	27
狐の時間	31
裏側の時間	35
現状の戦闘の時間	39
長門の時間	44
閑話 真つ黒の時間	48

プロローグ

殺せんせーは死んだ。

いや、光になって消えた。

渚という教え子の・・・いや、担当した3年E組の皆に囲まれながら、渚君のナイフが殺せんせーの心臓に刺さった瞬間から、淡い光の粒となり、消えていった。

この物語は・・・新しい物語のプロローグかつ、世界を変えた人々の伝記のようなものである。

光が集まり始める・・・満天の星空の下に・・・それが徐々にタコの形となり「にゅゃあ!!」

となんとも情けない声がしたそうだ。

ここがどこなのかわからないタコこと殺せんせーは、とりあえずゆつくりと腰を降ろした。

自分は死んだはずだ。

それが生きている。

姿もタコのようなままだ。

なぜ・・・でしょうね？

顔色をコロコロと変えながら、ぼんやりと空を眺めた。

数分が過ぎた頃に、殺せんせーは星座が自分が生徒達に教えていたのとは、場所が異なる（或いは無くなっている）事に気がついた。

「ヌフ、ヌルフフフ・・・そもそもここが日本なのか、それとも違う国なのか・・・とりあえず世界を回りますか。」

若干の疲労はあるものの、殺せんせーは立ちあがり、体に力を入れ、空へ飛んだ。

約30分後・・・殺せんせーは元の場所に戻っていた。

「・・・地球ではありませんが、少し地形が違う場所がチラホラありますねえ・・・何より人の形に似ていて異なる生物がチラホラいますねえ。」

個性というものを知らない殺せんせーは異形型個性を人とは別の生物と認知した。

しかし、情報量の不足に殺せんせーはまた別の場所へ行き情報を集めるのだった・・・

「そもそも時代が違うのか、はたまた世界が違うのか、時間軸が違うのか、それとも異世界なのか・・・」

多数の仮定と

「ただ、ここには柵ヶ丘なる場所はどこにも在りませんでしたねえ。」

確定的な真実

「……どちらにせよ、ここには柵ヶ丘のE組は存在しませんねえ。」

この不思議な現象を殺せんせーはすぐに割りきつた。

「生徒の皆さんには会いたいですが、不可能は不可能と割りきらなくてはなりませんねえ。渚君に刺された瞬間に死んだのですから……また自由に生きてみますかねえ。幸いにも暇潰しかつ面白そうなそこら辺に沢山ありますからねえ……ヌルフフ。」

暇潰しかつ面白そうなものとは個性のことである。

異形であつたり、電気や炎を体から出す者等の様々な人間を殺せんせーは見てきた。これらがどういう仕組みなのか……殺せんせーの知的好奇心を大いに刺激した。

また、うつすらとだが、殺せんせーの中に残る死神としての殺しの技術の更なる昇華に繋がるのではないか……という思考も殺せんせーが自分でも気がつかない位だったが、それも個性を研究してみようという意欲に繋がった。

殺せんせーはすぐにこの不思議な力及び姿、現象を個性という身体機能であることも理解した・・・

「ヌルフフフ、しかし個性の研究データは膨大ですね。先生のスピードを持つてしても現在の個性事例を全て網羅するには時間がかかりますし、個性の事件、事故、成長の触れ幅・・・面白いですねえヌルフフフ。」

そこには不気味に目が光り、大きな口で笑う殺せんせーが月光により怖く存在していた。

ヒーロー・・・それは個性を使い人を助ける職業・・・災害、犯罪、人災 e t c・・・
そういった人の災いとなる事を自己犠牲の精神、強靱な肉体、咄嗟の判断、鍛えぬかれた個性を使用して守り、退け、時には警察と協力して捕まえる職業。

その逆にヒーローの敵はヴィランと呼ばれ、犯罪を犯したり、人々を困らせ、時には個性を使って暴りたい等の破壊衝動等により人を傷つける者達である。

このヒーロー社会、ヴィランを親に持つ者も少なからずいる。

そういった者は表社会で生きていくのが困難となる。

とある少女がいた

個性は【軍艦】

母親は個性：武器

父親は個性：船の敵ヴィランだった。

ヴィランといつても人を殺すのではなく、薬や違法な物を海上で密輸したり、運び屋として活動していた。

この親達はそれしか生きる道が無かったのが正しい。

親の親・・・少女からすれば祖父母もヴィランであり、親達もろくに学校にも通えなかった低学歴・・・いや、無学歴が正しいだろう。

戸籍も無く、住む場所もコロコロ変わる。

名字もない。

なれるのはやっぱり敵ヴィラン関係の闇仕事しかない。

結局親につられて子供も敵ヴィランになる悪循環・・・ただ、この少女は親の仕事を見ながらも、心のどこかでヒーローというものに憧れながら、今日も個性を使って密輸の手伝いをしていた。

「居たぞ!!ここらを荒らしてた敵だ!!」
ワイラン

「俺に任せろ!!水音波」

個性を使い、海上輸送中の少女はその音波攻撃を諸に受ける

まだ幼い少女はその攻撃でそのまま海に沈んでいつてしまう。

海上では親達が少女を探しながらヒーローを迎撃し、ヒーローも死人を出したとなれ

ばヒーローとしてのキャリアが終わるため、こちらも沈んだ人を探しながら攻撃する。

数分間に及ぶ激闘の末、親達は少女を切り捨てる事にした。

親達も残った荷物を運ばなければ依頼人から殺されかねないからだ。

涙を流しながら、自身が放てる最大級の威力の技海の上で放った。

ヒーローはその衝撃により発生した津波を避けきる事ができず、巻き込まれ、1人は

殉職、もう1人は運良く海岸に打ち上げられ、軽傷ですむのであった・・・

この世界にも貧富の格差はある。

個性が発見されてからはより格差は激しくなった。

仕事と個性が上手く組合わさった者、元々金持ちだった者、時代の変化に早くから適

合できた者・・・成功者達は膨大な金を得た。

逆に没落、スラム街の形成、個性による社会不適合者の増加、ヴィラン敵という犯罪者・・・これらは負け組である。

現在海で流され、海面にプカプカと浮かんだり、沈んだりしている少女は負け組にあたるのであろう。

その背中で優雅に毛繕いしているカモメは勝ち組？になるのか？

そんな馬鹿馬鹿し事はこの際どうでもよい。

勝ち組、成功者と呼ばれる者から突発的に負け組、不適合者が現れることもある。

それは両親から受け継がれる筈の個性が全く別の個性だった時である。

突然変異やミューテーションと呼ばれるものだ・・・

今釣りをしていた殺せんせーが「大物ですよ!!」と叫びながら釣り上げた少女がこの物語のヒロインだとすると・・・

・・・突然変異として親、兄弟から見放され、別荘という名の牢獄に閉じ込められた個性【電磁石】の少年が主人公となるだろう・・・

・・・タコのような何かに拾われた。

ヒーローと呼ばれる人に攻撃されて沈んで、波に流されて・・・

気がついたらタコみたいな人？に助けられていた。

「おや、気がつきましたか。」

黒くてながーいスカート（アカデミックドレス）に三日月が描かれたネクタイを助けてくれた人は身に付けていた。

「ささ、火の近くによって。布団ですぐくるまつて。」

ごわごわした布団にタオルを触手のような手・・・いや、触手で優しくくるませてもらった。

自然と涙が出てくる・・・その様子にタコみたいな人はニュニヤ!! ニュニヤ!! と言いながら慌てていた。

その姿はどこか可笑しくて、なんだか心が暖まる・・・そんな感じだった・・・気がする。

たまたま釣り上げたのが少女で慌てた殺せんせーだったが、少女を助け、介護をして
いるうちに落ち着きを取り戻していった。

(さて、この子を親御さんに届けなくてはいけませんね、何か手がかりは……)
殺せんせーが少女が背負っていた荷物を持ち上げる

(……2から30キロもありますね……薬に銃ですか。この少女に詳しく聞いてから
ですが、親御さんに帰するのは一旦保留にした方がよろしいですね。)

この出会いが殺せんせーと少女にとっての始まりである。

5歳の時間

「あなたの名前はなんと言うのですか？」

朝になり、眠そうに起き上がった少女を見て、焚き火で魚を炙っている殺せんせーはそう質問した。

まばたきを数回繰り返した後、少女はこう答えた

「・・・長門・・・と呼ばれていました。」

「長門さんですか。いい名前ですねえ。」

名前を聞いた殺せんせーは少女こと、長門さんに焼き魚（骨抜き）を食べるかを聞き、長門さんがコクコクと首肯くき、両手で魚と支えられている木の棒を受けとると、かぶりついた。

その様子を黄色の顔でニヤニヤしながら殺せんせーも魚を食べ始める。

食べている少女を見ながら、殺せんせーは釣り人のおじさん達との会話を思い出して

いた。

「タコのおんちゃん、今日はどうだい？」

「ヌルフフフ、今日も大漁ですよ。」

「おお、流石タコのおんちゃんだ。なんかコツでもおんのかねえ？」

「この手足の触手は普通の人の手足よりも感覚が敏感なので、魚の動きが良くわかるのですよ。」

「にしてもスゲーや。」

「町田さんの個性だったら大漁になるのでは？」

「おいおい、個性の違法使用は御法度だぜ。俺みたいに周辺を巻き込む個性だとすぐに敵認定されちゃうからな。」

個性・・・そう、この超常社会は私をタコという個性持ちだとしてすぐに受け入れられた。

国籍が無いので、一部の公共機関に制限は有りますがね。

会話してわかったことですが、人は個性の使用に敏感であるということだ。

常時発動型や異形型と呼ばれ者以外は、周りを気遣って個性をあまり発動しない。

ヒーローと呼ばれる個性を使用することが仕事の者は例外だが。

そんな個性を悪用する者が敵。

もしかしたらこの長門という少女も敵ワイランなのかもしれないと殺せんせーは思った。

頭からはえている船の艦橋のような何かは個性によるものなのか・・・

(食事が終わったら聞くとしますかねえ。)

個性〔軍艦〕

長門から聞いた瞬間に殺せんせーはこの少女が個性を使用しての運び屋をやらされていたことを理解した。

殺せんせーは

「長門さんは夢がありますか？」

この時親御さんの所に帰りたいですかとか会いたいですか？と聞かないところに殺せんせーが長門さんのことを育ててみたいという気持ちが見れていた。

「・・・ヒーローになりたい。私みたいな子がいなくなるような世界にしたい・・・です。」

5歳という年齢とは思えない、意志が殺せんせーには見て取れた。

「ヌフ、ヌルフフフ．．．良い答えです。その言葉を忘れてはなりませんよ。．．．では、あなたに私の全てを教えましょう。」

後から少女長門はタコのような人を死神とか殺せんせーという名前を知ったが、この時の殺せんせーは世界一ヒーローの様であったと語ることになる。

相手が八木俊典であつたとしても．．．。

別荘から更に不気味な施設に移動させられている少年がいた。

現在彼の姿は布の袋を頭から被せられ、手錠をつけられていた。

服は一応着ている。

移動用の車？トラック？は座り心地は最悪だが、暖房は付いており、適温な車内で少年はじつとしていた。

近くから複数の泣き声が聞こえてくることから、周りには自分と同じような境遇の子を居ることに少しだけ少年はホッとしていた。

そんな時、車が急ブレーキをかけた

「野良ヴィランかよ。」

「このガキらはボスの更に上にいるらしいスポンサーへの貢ぎ物だぞ!! 迂回はできねーのか!!」

「ダメです!! パニックつた周りの車が邪魔で動けません!!」

「チィ・・・!!? あの敵^{ヴィラン}何吐いてやがる!!」

「調べます・・・ナパーム!!」

「脱出するぞ!! ボスに殺される前に殺されかねえ!! 適当なガキ選んで連れてけ!! 残り
は置いておけ!!」

個性【物質判定】をもった男の言葉で車に乗っていた男達は慌てて車から逃げた。

不幸なことに少年は車に置いていかれた。

同時に幸運にも恵まれ、少年は足を縛られていなかったこと、慌てたことでドアが半
ドアだったこと・・・そして

「少女を釣り上げたら、今度は少年が空から降ってきましたよ。・・・酷い火傷だ。せん
せーでなければ死んでましたね。」

外に出られたことにより爆破ではなく爆風で吹き飛ばされ、買い出しをするために空を超高速移動していた殺せんせーに拾われたことだ。

主人公と少女はこうして殺せんせーと出会う。

子育ての時間

田園風景が広がる場所に2つの建物が有りました。

片方は木製の校舎のような建物で、中には教室と書かれた木製の札が釘で柱に打ち付けられており、その更には教卓と机が2つに椅子が3つ置いてありました。

横の部屋は12畳程の広さがあり、布団が2組畳まれていた。

食堂とトイレと書かれた札が立て掛けられた部屋も存在した。

殺せんせーに助けられた少女の長門、爆風で大火傷をしたために、記憶が一部無くしてしまった少年の2人がそこで暮らしている。

少年は殺せんせーが保護した際、焼けたハンカチに高畑と書かれていたが名前が読めなくなっていた。

苗字が無い少女、長門に名前が無い少年、高畑・・・運命の悪戯なのか、必然だったのか・・・。

隣の建物には殺せんせーの顔の形に窓と扉が配置された殺せんせーの家があった。

森の景観をぶち壊す痛ハウスだ。

中も子供達が入ってきてても大丈夫な部屋と、巧みに隠された殺せんせーの自室の2部屋だけだ。

自室には壁一面に小汚ないエロ本がびっしりと飾られ、漫画、食べかけのポテチ、ハズレの馬券等が落ちていた。

ただ、漫画に関しては、この世界の物ではなく、殺せんせーが生きてきた世界で自分が読んでいた漫画をコピーした物だ。

(今は読むことができないでしょうが、数年以内にはこの漫画を使って授業をするかも知れませんねえ……)

それは殺せんせーなりに考えた個性の育成方法だった。

個性【電磁石】

それが高畑少年の個性だ。

四肢からコイル状の金属を生やして周囲に磁力を発生させるといふ微個性と呼ばれるものだ。

記憶を失っている影響なのかもしれないが、磁力に関しては、発動半径10cmと普通なら本当に微個性で終わる個性だ。

殺せんせーは個性について調べているときに目についた

【個性は身体の一部】

ということに注目し、身体の成長期に連動して個性の成長もおこなわれるのではないかという仮定を立てていた。

また、電磁石という性質は体内で僅かながら電気を作り出していることを意味し、電力の発電量、蓄電量、送電量、磁力に変換した時の抵抗の緩和、コイルの延長・・・これ等が出来て初めて磁力が上がると考えた。

「とは言え、体のどこで発電しているのか知る必要もありませんし、顔の火傷の影響で感情

を面に出せませんから、そこら辺のリハビリもさせませんと・・・ヌルフフ。」

高畑だけでなく少女長門の個性〔軍艦〕についても殺せんせーは調べていた。

彼女の個性は強個性と呼ばれる中でも桁外れに自由度と性能が高い事がわかる。

名前の通り軍に属する船の特徴を体に現すことができる能力で、毎日個性を使用しての運搬をしていたため、個性の使用限界を超え、それを回復しようと体を治す筋肉の超回復と同じことを個性でおきていたらしく、発現時は水に浮く、木製の板を出す程度だったらしいのだが、今は手首を上上げることで弾を発射することができるよう、肘から発射口の手首までにかけて鋼鉄化し、その内部はライフリング加工がされていた。

つまり彼女の個性は鍛えれば鍛える程、船の歴史を進むように強くなると仮定できる。

「どのように教えるのが最適なのかまではわかりませんが、私なりの教育を続けましょう。」

子育ての時間2

僕は誰なんだろう？

僕はなぜ笑えないんだろう？

僕はなぜ顔が真っ赤で、せんせーが包帯を毎日交換してくれる。

僕は記憶が無い・・・かわりに微妙な個性とせんせーと長門がいる。

せんせーは僕の微妙な個性を

「素晴らしい個性ですよ。高畑君の努力次第では強い個性に化けることでしょう。」
と言ってくれた。

僕はそんなせんせーが好きだから・・・せんせーの様なカッコいい人になって長門を
守れるようになるんだ。

それが今の僕の夢だ!!

「基礎の勉強と平行しながら暗殺教室で培ってきた暗殺の授業、更に個性の授業・・・又ルフフフ、この子達はどうか成長するのか・・・長らえたこの命、私の全てを教えなければ・・・幸い私のエネルギー源である反物質の体内生成のサイクルは2年周期・・・なかなかのギャンブルですね。」

殺せんせーは体内で生成される反物質によってマツハ20のスピードや、光線をできたり、発射したりするが、細胞分裂のサイクルで反物質エネルギーが体内で収まりきらなくなり、爆破という形で終わる。

このサイクルを直すためには体を液体化させる毒物を摂取する必要がある。

ただこの方法は絶対ではなく、1%未満(約0.5%前後)で大爆発を発生させてしまう。

その爆破は間違いなくこの世の全ての生物を絶滅させ、最低地球の3割は消滅する。故にギャンブル。

この2人には自身を殺すことのできる暗殺者に育てながら、2人を消滅させてしまう爆破が発生しないことを願うギャンブル。

「又フフ、勝ちますよ私は・・・。」

殺せんせーと少年少女の2名は個性を使いながら授業を受けるといふ常識はずれな事をしていた。(一般常識が無い2人にはこれが普通と思われていたが・・・)

授業内容的には小学校1、2年生で習うことを殺せんせーが分かりやすく教え、勉強中は少女の長門は銃や大砲等の発射が禁止の代わりに常に装甲に外皮を部分的変化させる訓練をし、高畑少年は鉄製の鉛筆を使用して磁力で手にくっ付けながら字を書くようにさせた。

授業以外では普通に能力全行使で殺せんせーを消滅させる気(それぐらいでは死なない事を知った上)で能力の限界超えを逐一行った。

本格的な訓練を初めて数週間で殺せんせーは高畑少年の致命的弱点を発見した。

【体内に熱を蓄積してしまう】事だ。

(メリットも有りますが、デメリットが大きいですね。元々熱が体外に放出しづらい体質が火傷によって更に体内に留まるようになってますねえ・・・【全力で活動できるのは夏で15分、冬で30分】というところですかね。)

熱が抜けないはそのまま脳や内臓系にダメージをあたえ、熱中症の様な症状になる。

ただ、体温が高まると高畑少年は発電量が上がるというメリットが存在した。

殺せんせーは高畑少年の体内に【発電機に近い物】が存在するのではないかと仮定をしたが、高畑少年の体内構造が明確にわかるのはもう少し後の事であった・・・。

【??な場所】

悪の支配者と呼ばれている人物・・・オール・フォー・ワンという個性を持つ男は2つの事に苛立っていた。

1つは昔に喜劇だと笑い死に体で逃げたしたヒーロー・・・八木俊典ことオールマイトが自身の配下を潰し回っていること・・・。

「実に不愉快だ。ああ、不愉快だよ。なあ【ミス・V】」

もう一つの理由はモニターに映る女・・・いや、女子高校生だった。

「べつつにー。私はなーんにも不愉快じゃないよ。」

「悪の支配者やら帝王やら言われている僕に衝突して生きていられているのは君の個性くらいだよ。」

「最初に助けてくれた時は感謝しているし、だから今もこうやって危険を承知でワンさんのモニターに映ってるんだよ。」

「ならばなぜ僕の邪魔を手駒を使ってするのだい？」

「いや、私も怒ってるんだよ。友達の狐さんに個性をワンさんが追加したから発狂したんだよ!!」

「あれは発狂ではないと僕は思うけどね。妖狐の個性に少女という個性を与えただけじゃないか。それを君達も望んでいただろ？」

「じゃあなんであんなにペットみたいで可愛かった狐さんがいきなり逃げ出すの!!」

（そりゃ元々あの狐は金髪の美人だったが、性同一性障害だったからだろ。いつもスーツを着て男装をしていたじゃないか。僕も確認した筈なんだけどもね。）

「で、君の友達だった狐はなんで僕の駒を数体潰したのかな？ けっこう使えただけだね。」

「しーらない。いや、本当ですからね。」

話が平行線になっていくことを理解した2人は一端黙り

「私が捜査しますからワンさんは手を出さないでほしいな。ダメかな?」

「この事は貸しにするからね。・・・ああ、いや、君の友達に【記憶を消せる子】が居たよね。あの子を貸してよ。大丈夫、危害は加えないから。」

「んー・・・事故らないようにさせてよね。たまに自分の記憶まで消しちゃう事が有るか。」

「消す前にバックアップしないとイケないとは難儀な個性だよね。僕には要らない個性だね。」

「じゃあそういうことで・・・まったねー。」

ブチンとモニターは切れる

オール・フォー・ワンは静かに黒くなったモニターの縁に手を当て、なぞる

「僕の影に居ながら僕の思い通りに行かないねえ、彼女は。ふふ、なかなか面白いじゃないか。」

怪物の時間

高畑少年は必死だった。

それは自身の活動限界による全力で動けなくなることで、少女長門の急成長にだ。

腕を大砲にしていたのが、肩の付け根から砲塔を出し入れ出きるようになったため、両手を自由に使えるという大きなアドバンテージが生まれたり、砲の火力上昇や彼女の体内に有るらしいエンジンの出力が上がるにつれて化け物の様な怪力と体力で高畑少年との戦闘能力を突き放していった。

「どうしよう……どうしよう。」

高畑少年の個性も発電量の向上によりできることは徐々にだが伸びている。

コントロールも長門少女に比べれば上手い。

だが、それらを帳消しにする活動限界という爆弾が高畑少年を更に焦らせる。

そんな様子をする子を殺せんせーは見逃すハズもなく

「高畑君、焦りは禁物です。」

「せんせー……でも長門にいつも負けちゃうよ……」

「大丈夫です。今は基礎を覚える時間ですよ。そうですね……来年には次の授業を始

めますから。」

「次の授業？」

「ええ。先生が【一番得意な授業】です。器用な高畑君ならすぐに上手くなりますよ。又
ルッフッフ」

（焦る気持ちは先生もわからなくはありませんが、基礎を固めなければ砂上の楼閣となるでしょう。）

殺せんせー自身も長門少女の個性の成長には驚いていた。

（まだ6歳・・・成長期真っ只中・・・いや、成長し始めの時期にもかかわらず素手で木を殴った衝撃で倒すとは・・・）

そこら辺にはえている杉の木を手がめり込みながら倒せる威力は通常の間人には不可能であり、身体強化系の個性と言われても信じられてしまう程である。

（というか強すぎませんかねえ・・・カチューシャの様な艦橋部分にまだ帆の様な物が付いているのが更に怖いのですが・・・）

長門少女の個性は伸ばせば伸ばすほど形が洗練されていくのだ。

そもそも訓練当初は力も高畑少年の方が強く、腕から出せる砲身も古臭い物だった。(もしかしたらですが、彼女が成長を続ければ先生の速度に追従できる可能性がありませぬ。)

と思いつつも音速の壁をパンチだけなら超えるかも程度にしか思っていない殺せんせーであつた。

【ロシア 旧ウラジオストク】

吹雪の中、この極東の都市だった場所では1人の少女が支配するヴィランの都市として裏社会では知られていた。

「適切な暴力が無ければ攻められる。食料が無ければ内から崩れる。あくあつ。なんで私が統治者の真似事なんかしなければならぬ!! Pさん。」

その都市の統治者に言われた【P】という男は実際にこの都市を経営する町長の様な人物で、周りからは統治者【ホワイト】の雑用係と呼ばれていた。

「んー、んー、んーホワイトさんがね、んーやらないとねんー、皆さんが言うことを聞きませんからね。」

「Pだけでやって!!もー。【非常食】!!なんか面白いこと無いの!!」

「あ、ホワイトちゃん、V様から電話だよ。」

「そいつは面白いことだねー♪すぐでるよ!!」

狐の時間

殺せんせーは観察していた。

狐のしっぽと耳が生え、ダボダボのスーツを着た金髪の幼女が自分と高畑少年、長門少女の住む森の中で酒盛りをしている姿を・・・

酔っているのかブツブツと小声で何かを呟きながらまたお酒に手をつける

流石に見かねた殺せんせーは幼女に近づき

「教育者として未成年がお酒を飲むのは見過ごすことはできませんねえ。」

と言った。

「ふふ・・・未成年かあ・・・未成年かあ〜」

酔っているのかそれとも素なのか殺せんせーは判断できないが、幼女のテンションがだだ下がりしているのはすぐにわかった。

「タコみたいな人「殺せんせーとお呼びください」・・・殺せんせー、おじさんは未成年ではなく、れっきとした成人女性だよ。・・・アラサー・・・28歳・・・なんだけどなあ・・・。」

「個性のせいですかね・・・えっと、お名前は」

「南狐・・・みなみきつねです。」

「狐さん、とりあえずそのお体でお酒は・・・」

「・・・そうなんだよなあ、こんなに不味い酒がいままで大好きだったのに、好きだったミヨウガもネギも不味く感じる・・・声もこんなに高くて体も小さくなつて・・・いまままで鍛えた筋肉も体術も無くなつたり、できなくなつたり・・・」

酒瓶を見るとほとんど飲んでないのかタポタポと瓶を狐さんが揺らすごとに音をたてる。

「ここだと寒いでしょう。近くに私達の家があります。そちらに移動しましょう。」

「・・・自分で言うのもなんだけど、おじさん不審者だよ。」

「幼女で自分をおじさん呼びするのは確かに不審者かもしれないかもしれませんが、コレでも教育者の端くれ。・・・困っている人は助けなければいけませんからねヌルフフ。」

「はは、変わつてんなあ。・・・助かる。」

「立てますか?」

「大丈夫だよ。」

南狐は創られた存在だ。

正確には人間によって創られた存在の子孫である。

昔話に出てくる化け狐が彼女の祖先である。

個性が認知される発光する赤ん坊が産まれるはるか前に誰かが立っている狐を化け物と呼んだ。

それが数十年の年月をかけ、噂が広まり化け狐という妖怪が人の創造によって造り出され、その恐怖心から「具現化」し、本当の化け狐が生まれ、この様に実態のある妖怪が人間や妖怪同士で交わり続け、人とは別系統の存在が出来上がった。

迫害されながらも世界中で妖怪や魔女、悪魔と呼ばれながらも子孫を残し、個性社会になり、ようやく表舞台を歩けるようになった・・・らしい。

ただ、発光する赤ん坊以前にも「個性」持ちは存在する。

「個性は純粋に人種の進化によるもの。私達化け物を祖とする者は何かの混血種。そして祖そのものは純血種とおじさん達は呼んでいるんだよね。」

殺せんせーは狐の話を実剣に聞く

「純血種はどれぐらいおられるのですか？」

「少なくとも1人は確実にいる．．．いや、知っている。」

「それが狐さんが『ミス・V』と呼ぶ人ですか。」

「Vは100%人ではない。誰かに創られた存在。そして．．．【世界を征服しようとして企んでいる。いや、自身を祖とした混じり物中心の世界に書き換えようとしている。】」

「この話を近くで殺せんせーの横で聞いていた主人公とヒロインは自身の人生を賭けた戦いになるとは思っていなかった。」

裏側の時間

南狐こと狐が住みはじめて半年が経過した。

最初の数日、狐の事をよそよそしく高畑少年と少女長門は接していたが、狐が料理や（殺せんせーでは教えられない）格闘術の基礎を教わるにつれ、少年少女は狐になつくようになってくる。

「格闘術が衰退」しているのですね。」

狐は殺せんせーになぜ格闘術を教えるのかと高畑少年と少女長門に教える前に確認を取った時に格闘術の衰退という衝撃の事実が明らかになった。

「衰退？おじさんが子どもの時からずっとそうだったよ。」

殺せんせーの生きてきた世界と個性社会の差

実際格闘術は身体構造が同じ者が効率的に相手身体にダメージを与える技術であるのに対し、個性には千差万別で、同じ身体構造をしているとは言いきれない部分があった。

また、筋肉増強系などの個性が平然と空手なんかを人に対して行えば普通に人が死んでしまう。

その為情報としての格闘術は存在するが、扱える人物はごく少数、更に言えば免許皆伝並みの人物は100万人に1人位である。

狐も覚えている【剣道、柔道、空手】基礎はわかるが、それ以上は彼女でもわからなかった。

「基礎だけでも解れば良いのです。そこから自身に合った体術を身に付けられる様にするば・・・」

狐も体が幼女スペックなので本当に基礎の基礎しか教えられないが、それでも高畑少年と長門少女は暗殺術の発展と身体構造の理解、相手と対峙した時の間合いの取り方等、後の糧となることを多く学ぶのだった・・・

【フランス パリ ジシングループ本社】

【ジシングループ及びジシン社】：世界最大の企業であり、ヒーロースーツの開発、販売、個性の鎮静剤、海運や自動車、ロボット等現代社会に必要な物を扱っていた。

また、数少ないオール・フォー・ワン率いる闇社会と真つ向から対決している会社であり、表向きオール・フォー・ワンと手を組んでいる【ミス・V】が統率する組織【オバライト】に資金援助、資源援助を行っていた。

【オバライト】も代価として護衛の人材を派遣したりもしている。

ただし、ジシングループがオール・フォー・ワンと戦えているのは派遣された人材に よるものではなく、ロボット技術を軍事転用した高性能サイボーグ、アンドロイド（材料には世界中の孤児を利用したもの）を使っている。

【ボナパルト社長】 今月の収支報告です。」

「ああ、ありがとう【ヒトララー】さん。」

ジシングループ会長兼社長【ボナパルト】：ナポレオンの子孫であるが、本家ではなく複数に枝分かれした子孫の1人である。

経営能力は高く、世界最大の企業にした手腕はナポレオン3世以上との評価を獲得い

る。

ヒトラーは愛人でもある。

ジシンググループ社長秘書〔ヒトラー〕・・・欧州では悪とされるアドルフ・ヒトラーの隠し子を祖先にもつ女性で、身体構造の9割をサイボーグ化している。

表向きはヒトラーの苗字を嫌い、エリカという下の名前で呼ばれているが、ボナパルトの愛人で、彼だけにはヒトラー呼びを許している。

オール・フォー・ワンと7回直接対決し、7回負けながらも逃走に成功する個性由来の異常な生存能力を持っている。

オール・フォー・ワン、ミス・V、ボナパルト及びアドルフ、そして高畑少年、長門少女にオールマイト・・・世界にはまだまだ組織はあるが、彼らを中心に回りだす・・・それはおびただしい犠牲を出す戦争の開始を意味する・・・

現状の戦闘の時間

殺せんせーと訓練を始めてから2年が経過した。

殺せんせーは僕達に本気で戦うように指示した。

僕と長門で殺し合いだ。

とはいえ訓練だから殺す気でやれっというところで、本当に危なくなったらせんせーと狐さんが止めに入る事になっている。

僕の手札は2年間殺せんせーに教わり続け、猫だましの発展技のクラップスタナーと罾、それにフリーランニングという移動方法に個性電磁石由来の手の指の関節部分にある鉄製の球体を使用したパンチに脇から腕を巻きつくように伸びているコイル（腕から5メートル先まで伸びる）を相手に接触した瞬間に電撃を流し込む・・・これくらいが僕にできることだ・・・

「重機関銃!!」

長門少女は両腕から生やした重機関銃で森の中を制圧射撃しながらゆっくりと進む。
(当たったら死ぬから・・・いや本気で)

対して高畑少年は地中にいた。

正確には落とし穴を接地しようとして準備していた時に木々がへし折れる音が近づいてきたので慌て隠れたのだ。

(長門だから銃で射つてくると思ったけど、容赦なさ過ぎでしょ。)

(どうやって距離を詰めるか・・・詰めなければ負ける)

(足跡が消しきれてなかったからここらへんはず)

個性電磁石の副産物?の磁界の変化により無意識下で長門がいる場所を地中でもある程度把握している高畑少年に対して長門少女は足跡や罠の場所で怪しい場所を徹底的に射撃していた。

「・・・機雷」

機雷と呟くと長門少女は両方のほつぺたを膨らませ、真っ黒になる。

半径2メートル位になったところで人差し指と中指で膨らんだほつぺたの付け根部分を挟むようにするとパチンと音とともに真っ黒い球体が地面に落ちる。

「・・・さてと」

地面に落ちた2つの球体を彼女が持ち上げると球体だったのが持っている部分以外がトゲトゲとなり、投げると地面にドスンとすさまじく重い音がし、周囲と同色化し、見えなくなる。

彼女はそれを繰り返していく

ある程度繰り返すと彼女自身が真っ黒に染まっていく

(磁力が反応してる?・・・)

「100mm垂直装甲!!からの・・・外装水雷」

右手首からモーニングスターが生え、それを掴むと槍投げの様に投げる。

「対シヨック体制移行」

地面に伏せると半球体の金属製の幕が彼女の背中から噴水のように吹き出し、瞬く間に少女を囲いこんだ。

次の瞬間大爆発が発生する

地面が盛り上がる

「げほっげほげほ．．．クソ、広範囲の爆破かよ。罨全部破壊されたし、木々が吹き飛んでフリーランニングもできない．．．!?」

一瞬の殺気で少年はコイルをバネのように使って空へ逃げる．．．すると先ほどまで立っていた場所に砲弾が着弾する

受け身を取りながら転がるように着地すると直ぐ様別の場所にコイルを使ってジャンプする

「視界が開けて場所が丸わかりか．．．なら」

砲弾が再び飛んできたので散らばっていた木の残骸を爆風避けに使いつつ、足場としてコイルをバネのように使って長門に急接近する

「くらえええええ!!」

「魚雷拳」

長門は5本の指をくっ付けながら真っ直ぐ飛んできた高畑少年に対して伸ばす。

高畑少年は指の関節から取れる鉄製の球体を長門に向かって30個近く投げた。

それを防ごうと長門が右手を払うと高畑少年の鉄製球体が触れた瞬間に魚雷に見立てていた手が爆発する。

爆煙が長門の視界を遮った瞬間に高畑少年は這いつくばる体勢をとり、長門の足首にコイルを巻き付け、電撃を流し込んだ。

・・・ブチ

長門は何事もなかったかのように巻き付いたコイルを力任せには引きちぎり、這いつくばっていた高畑少年に左手を再び機関銃に変えて銃口を頭に突き付け「チエックメイト」

じんわりと嫌な汗が高畑少年の顔から滲み出る

頭をフル回転させ、現状を打開しようと考えてるが、活動限界により体から水蒸気が発生していた。

(体が熱い・・・残り20秒でどこか。・・・詰んだな。)

「はいそれまでですよ。」

殺せんせーが長門の機関銃を掴んで訓練は終わった。

長門の時間

少女長門の個性は時間が進むにつれ、進化する。

鍛える度に、活用できる武器が増える。

「これがどれ程恐ろしいことか・・・おじさん的には洗脳とかの搦め手以外は無敵になると確信してるよ。」

「はあ・・・そうなんですか?」

高畑少年との戦闘訓練を終え、その日の夜

戦闘の興奮からか珍しく夜更かしをしていたため、別室で寛いでいた狐が気がついて声をかけてきたので、そのまま個性の話になった。

「個性関係もあるから歴史は勉強しているのだから?どこら辺の船を見立てているんだ?おじさんに教えてみなさいよ。」

狐は軽い口調で言っているが、ある程度予測はできていた。

(南北戦争から1900年手前辺りだろうな。)

「たぶん・・・第一次世界大戦の船なら真似できる。」

「な!?!じゃあ今日の戦いは全力じゃないの!?!」

「全力です狐さん。ただ、不安定過ぎて実戦で使えるレベルではなかったので・・・」
長門は腕を砲身に変えると腕を垂直に上げた。

そのまま砲弾を装填しようとするが上手く装填できてないように見えた。

「自由な角度で装填することができてないし、両腕の合わせて4発撃てば1分の装填時間が必要ですし、12発撃てば5分間砲撃モードにできなくなります。」

明確な弱点は他にもあったが改善傾向なため省略する。

「砲撃はここぞという場面だけで後は機関銃及び機雷で対処する・・・ねえ。」

「実験中ですが潜水モードもあります。ただ・・・」

「？」

(個性の幅が広すぎる・・・純粋なパワー、スピード、火力に防御力どれも特化した個性に勝るのに、地形の影響をほぼ無効できる・・・)

潜水モード・・・自身の呼吸が続く限り、身に付けている物ごと地中に潜る事ができる。

息ができなくなると【空気があるもつとも近い場所】に弾き出される

地中からの奇襲をしほうだい、土砂で崩れた場所を移動可能、攻撃の緊急回避可能と別次元の強さだ

(軽く考えただけで善にも悪にもなる個性だよ全く・・・ミス・Vが洗脳してでも欲しが
るなこの子は・・・よし。)

「長門ちゃん、このお札をあげるよ。勝利の記念としてね。」

「?ありがとうございます狐さん。」

狐が渡したお札は少女長門が手に触れるとスーと消えていった

このお札は狐が元々持っていた「能力(個性ではない)」によるもので、様々な呪いと低温の火の玉を操れるらしいが、呪いはまじないにもものろいにもなる。

狐が長門にかけた呪いは「記憶を操作しようとするとお札が1回だけ防ぐ」というもの

1回の定義が曖昧なのは狐が曖昧の方が利用しやすいという個性のようにできるところが決められていない緩やかな方らしいものだ。

(記憶操作の個性や力を持っている人は少ないけどおじさんが知ってるだけでも多数いる。)

(おじさんみたいに脳に強烈な負荷がかからない限り彼ら彼女らはV達の【友達】……いや駒でしかない。)

【脳無生産用実験場】

「記憶を消すよー♪消しちゃうよー♪」

「ライアさん、また自分の記憶も消してるよ。バックアップ取るの大変なんだけど。」

閑話 真つ黒の時間

【ジシングループ 日本統括本部東京支店】

『東條支店長』、オールマイトは相変わらず素晴らしいですなあ。関連グッズが飛ぶように売れますねえ。』

『しかりしかり。』

『・・・しかしメイン商品のヒーロースーツを頑なに拒むのはいかかものか。』

『直接的な売り上げで見れば赤字だが、ジシングループとして見れば宣伝効果ははかり知れん。』

ヒーロースーツの開発及び販売は国からの補助金が無ければ大赤字だが、技術開発を政府の補助金を使いながら出来る、ヒーローが有名になれば関連商品を売りやすい等というメリットが存在するためサポート会社と一般人から言われる企業は多少赤字になろうがヒーロースーツを作り続けていた。

「各支店長の皆様」、オールマイト氏は象徴であり、別格であります。それよりも他のヒーローを育成する方がお得ではないでしょうか。オールマイト氏も所詮は人間、無敵でも必ずいつか引退するものです。」

『治安さえ維持できていれば良い。それだけで我々は利益に出来る。安全ほど今の世の中高いものはない。』

「ええ。．．．失礼、一旦モニターを切らせていただきます。」
『ではまた。』

ブチンと音とともにモニターは真つ暗になる。

「．．．」

東京支部にて東條支店長と呼ばれた男は椅子に深く腰かけた

(危ういな。オールマイト氏だけに依存している社会．．．裏のパワーバランスが劇的に変化している現状)

オール・フォー・ワンの勢力がオールマイトに片っ端から潰され、配下なのか協力者なのか敵対しているのかよくわからないミス・Vが徐々に勢力を増やしている

(恐らく近くどちらかと私は激突するだろう。他の支店長はなにも準備してないからな．．．)

椅子から立ちあがりコツコツと音を立てながら目の前にある円柱状のガラス製カプ

セルを叩く

〔製作費200億円、運用コスト50億円、30年間の維持費50億円……〔人形最終兵器〕の名に相応しい金額だな。〕

東條は独自に戦力を確保していた。

ヒューマロイド、アンドロイド、サイボーグ……完全に非合法だが、それだけ2つの勢力を東條は不安視していた

（……〔ボンクラ息子〕の護衛にも中々使える人材を見つけられたからな。……死ぬ前に戦える土台を作るのが私の役目）

これだけの裏金を使用するためにジシン本社に技術は全て流していた。

この技術が後々欧州と日本で大騒動を引き起こす事になるのは東條は薄々感じていた……が、例外を除き口を割る事はなかった。